

有限会社 宮本染工

手書きするハンドペ
機械とは違うあじ、風味が
出きます

心こめて書きますから
そばが好きやうて
いうてくるネが
ぶろさんですわ

手で書き、手で染める
昔ながらの技法で
暖簾を作り続ける

パソコンの普及や印刷技術の進歩で、今では簡単に安く暖簾や旗を作ることができます。でも、うちは手で文字や絵を描き、手で染める手書き・本染めを貫いています。時間も費用もかかりますが、機械では出ない個性、何とも言えない温かみにじみ出るんです。

休業時代も合わせると、親父は何万回と手で文字を書きました。書体の書き分けも手が覚えているようで、簡単なんですよ。ほんま、親父はすごいなと思います。

費用も時間もかかるのに、わざわざ注文してくださるお客様は、手書き・本染めが醸し出す良さを理解してくださってると思います。その期待に応えるために、1文字1筆に精魂こめて、迫力ある旗や暖簾を作りたいですわ。

二代目 宮本 浩二さん



昔は新聞に
スミで下絵を書いて
練習したもんです



色は
配合によって、
多彩に
作れます



親父さんは、うじん、寿しの文字を
数えきれないくらい書いた。
どんな書体でも、
見本があれば、
フリーハンドで
書くことが出来る。

はっぴ
旗、暖簾に法被、座布団まで父子で
力を合わせ温もりある製品を作る

うどん、寿しなど飲食店の暖簾、神社のお祭りのぼり、横断幕や応援旗、大漁旗…。宮本染工が作る旗やのぼりは、職人の手で作られている。文字の輪郭を書くことを「袋書き」と言うが、お父さんの宮本 修さんはフリーハンド。修業時代も含めると数えきれないほどの袋書きをし、書体の描き分けも手が覚えている。書きなれた文字なら、数秒で書いてしまう速さだ。

二代目の浩二さんは、お父さんが書いた下書きの線にそって糊づけをする「防染糊を置く」という作業を担当している。これも技と集中力のいる仕事で、染料をにじませず、文字や絵の輪郭をはっきりさせるための役割がある。乾燥後に地色部分を刷毛で色を塗る「染め」、また乾燥させて色落ちを防ぐ「色止め」、水洗いして糊を落とし、乾燥して仕立て、アイロンかけして完成。大きなサイズのものだと、1週間ぐらいかかることもある。

生地は綿が中心で、麻も多い。使用する化学反応染料は気温や湿度によって微妙な違いが出るため、お客様の要望する色に仕上げるには、何度も色テストを重ねる。糊や染料を乾かさないと次の工程に進めないの、夏にストーブ、冬に扇風機をつけることも。

座布団や風呂敷、たすき、さらには結婚お祝い用の旗など、暖簾や旗以外の注文も増えている。「大阪名物くいだおれ」のくいだおれ太郎の法被も宮本染工が作ったもの。お父さんが書く手書きならではの良さ、思いのこもった製品は、やはり機械には負けないパワーがある。

有限会社宮本染工

http://www.norenja.net/
〒544-0012 大阪市生野区巽西3-4-9
TEL 06-6758-0325 FAX 06-6758-1857

事業内容/暖簾、のぼり、旗、幕の製造販売(手書き・本染めを今でも買っている、大阪でも数少ない工房。自宅に併設した工房で、家族だけで製造する)



梅雨など湿気が多い日は乾燥しづらいので暖房器具を入れて乾燥しますねんそりやサウナみたいでマッせ

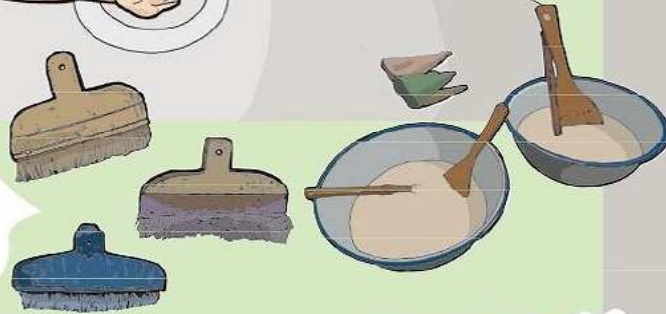
年始から新しいのれんや旗をかけたという店や施設が多いので毎年年末にかけてはものすごく忙しくさせてもらってます

若い時は道頓堀に行ったら手書きののぼりやのれんであふれてました勉強のためによう見に行きました書体で字を見たらそれが誰の仕事かわかりました

神社とかは機械印刷ではダメでしょ



下絵につける防染のりは、革のはぎれて作った手作りのしぼり器で、少(す)ずつ出しながら塗っていきます。ケーキのクリーム絞るみたいにでこ



色はハケを使ってぬっていくんです

我が社の自慢
どんな文字もお父さんが手書きで書いてしまう!



お父さんの修さんは、あらゆる書体の特徴を手で覚えているので、どんな文字も簡単に書きあげる。定番書体がないオリジナル文字も、見本さえあれば書くのは簡単。パソコンで作られたものが多いなか、自分の書いた文字は見た瞬間にわかるという。作り手の個性が出るのが、職人仕事だ。

「のり」は塗るのではなく「置く」と表現する。浩二さんがつくりお母さんがゆるッがすぽ。